

Contents *****

特集：架空小説・ロムニー政権誕生	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”Ohio: Coal or cars” 「オハイオ州：石炭かクルマか」	9p
<From the Editor> とは言うものの……最終予想	10p

特集：架空小説・ロムニー政権誕生

間もなく米大統領選挙の投開票日を迎えます。以下は「もしもミット・ロムニー候補が当選したら」というシミュレーション小説です。あくまでも思考実験ですので、細かな点はいくらでもお気にかけませぬように。また本稿の設定はすべて筆者の想像力の産物であり、特段の「ソース」があるわけではないことをお断りしておきます。

●開票：デイビッド・アクセルロッドの憂鬱

時計はすでに午前 3 時を回っている。各州の選挙結果は刻々と明らかになりつつある。わざと部屋を暗くして、シカゴのオフィスで CNN の画面を凝視しているデイビッド・アクセルロッドの思考は、先ほどからうわの空で遠い記憶をさまようばかりである。

選挙の仕事を始めたばかりの頃、師匠と仰いだ上司はこんなことを言っていた。「負け戦の経験は宝物だ。なぜなら勝った戦いは、かならず余裕を残して勝っている。しかし負けた戦いは、100%の力を使い果たして負けている」

ほんの 1 か月前までは大差の勝利を予想していた。それが第 1 回のテレビ討論会で流れが変わった。大統領は、もっと入念に準備をしておくべきだった。それから最後の 1 週間を、ハリケーン対策に取られたのも痛かった。だが、現職の大統領にとって時間は希少資源である。「時間が足りない」という言い訳はこの仕事には通用しない。

CNN の画面では、共和党副大統領候補のポール・ライアンが上気した表情で、ウィスコンシン州の有権者への謝辞を述べている。見ているアクセルロッドにとっては身を切られるように痛い。あそこの 10 人の選挙人は、わが方が押さえるはずだった。画面ではコロラド州も赤い色に塗られている。この 2 州の結果は予想外であった。

それ以外は事前の予想通りであった。焦点のオハイオ州は、あっさりとおバマが獲得した。4年前から着々と準備をしていたことが功を奏したのである。フロリダ州とバージニア州はロムニーのものになった。これでオバマが獲得した選挙人は265人。ロムニーは267人。残された州は、選挙人数わずか6人のアイオワ州のみである。

「分からんものだな、アイオワが最後になるとは」

つい愚痴のような言葉が漏れる。

2008年1月3日、雪の中の州都デモインの光景を思い出す。予備選プロセスの緒戦、アイオワ州党員集会におけるヒラリー・クリントンとジョン・エドワーズは強敵だった。あの戦いに負けていたら、オバマ陣営はその時点で終わっていた。若き新人上院議員の事務所は選挙資金も乏しく、隣のイリノイ州からかき集めた学生ボランティアだけが頼りだった。真面目な話、アイオワで負けたら事務所は解散する予定だった。4年10か月前のあの冬、自分たちは「ダメもと」の立場だったのだ。

しかしふたを開けてみれば、バラク・オバマが僅差の1位だった。人口約300万人で、その95%を白人が占める州において、黒人候補者が勝ったのだ。そのことによって、オバマが唱えていた「変革」(Change)には現実味が伴った。

その日の勝利演説で、オバマは「これは皆さんの勝利だ」と告げた。興奮した大観衆は、”Yes, we can.”の大合唱で応じた。あの日の興奮から、オバマ政権誕生への助走が始まったのだ。

アクセルロッドは、再びCNNの画面を凝視する。アイオワ州で始まった伝説は、このアイオワ州で終わるのだろうか。

ドアをノックする音がした。インターンの学生がドアの隙間から顔だけを覗かせて、「ワシントンとの電話会議が始まります」と小さな声で告げた。その瞬間、アクセルロッドは覚悟を決めた。これが良い知らせであれば、選対本部長のジム・メシーナは自分で誘いに来るだろう。誰かに呼ばせたからには、悪い知らせであるに違いない。おそらくは「アイオワの敗色濃厚」という知らせが入っているのではないか。

勝てないと分かった瞬間に、オバマ選対本部は「プランB」を発動することになっていた。この場合、アクセルロッドの次の仕事は、記者会見の時間までに敗戦の弁の構想を組み立てることだ。といっても、箇条書きのメモを提出すれば事は足りる。あの痩せた男は、自分の政治生命が懸ったときにいつもそうだったように、一人で問題を抱え込んで苦しみ、自分が語るべき言葉をひねくり出すのだろう。今日ばかりは、お気に入りのスピーチライターたちも出番はないはずだ。

アクセルロッドは立ち上がって部屋の電気を点けた。

「アイオワで負けるということは、白人有権者に見捨てられたってことなのかな」

そんな風に口に出してはみたものの、答えはすぐには浮かばなかった。負け戦で、100%の力を出し切ってしまったからなのだろうか。

● 議会：ナンシー・ペロシーの決断

ホワイトハウスの執務室には、普段とあまり変わらない様子の大統領が待っていた。どんな風に声をかけたらいいか、つい先ほどまで迷っていた下院民主党院内総務のナンシー・ペロシーは、いつもと同じように砕けた調子で語りかけることにした。

「ご機嫌はいかが？ ミスター・プレジデント」

「レイムダックの気分を味わっているよ。思ったほど悪いものではないね」

バラク・オバマは答えた。選挙に負けた後も、第 44 代合衆国大統領であることに変わりはないが、その任期は 2013 年 1 月 20 日の正午までである。間もなくホワイトハウスには、ミット・ロムニー次期大統領のスタッフたちが訪ねてきて、政権移行チームの引継ぎが始まるはずである。

「こちらはレイムダック議会の報告に参りましたわ。週明けにすぐ招集して、クリスマス前の 12 月 23 日に閉会します。6 週間ですべての問題を片づける必要があります」

「例の『財政の崖問題』だね。与野党の合意が成立しなければ、来年のアメリカ経済は大変なことになってしまう。私は不思議でしょうがないんだが、こんな状態でなぜ株価が上がっているんだろうね。マーケットの連中は、私が負けたのがそんなにうれしいのかな」

11 月 7 日朝のオバマの敗北宣言とともに、ニューヨーク証券市場ではラリーが始まっていた。それと同時に債券は売られ、長期金利は上昇していた。と同時に、為替レートはドルの独歩高となった。ドル円レートなどはすでに 85 円に近づいていた。

「ゴールドマンサックスなどのウォール街の大手は、今回はこぞってロムニーに献金していたな。2008 年とは大変な違いだ。よっぽど金融規制が嫌だったんだろうな」

「それよりも議会選挙の結果を見てるんだと思いますわ。下院は共和党が 238 議席、民主党が 197 議席。大敗した 2010 年中間選挙とほとんど変わらない結果でした。上院は民主党が 2 議席減らして 51 議席、共和党が 49 議席。これは敗北です。私たち民主党が負けて、ティーパーティの言い分が通ったということです」

「でも、上院の多数は残ったんだよね。少しは頑張れるんじゃないのかな」

「ええ大統領、医療保険改革法案を破棄するためには、60 票の賛成が必要です。共和党がいくら頑張っても無理でしょう。大統領の偉大な業績が覆されることはありません」

下院議員として長いキャリアを持つペロシーは、議会内の手続きから議員心理のことまで何でも知っている。2010 年の医療保険改革法案 (Affordable Care Act) も、彼女の票読みの正確さによって成立したようなものであった。

「しかし大統領。上院の 2014 年選挙では、再選がきわめて危うい民主党議員が何人かいます。彼らは簡単に共和党に切り崩されてしまうでしょう。予算や税制の問題では、こちらの主張通りにはできないと思います」

「つまりブッシュ減税の延長を認めろ、というのかね？」

「おっしゃる通りです」

二人の間にしばらく沈黙が流れた。

「ブッシュ減税は富裕層も含めて2年間延長。給与税減税と緊急失業給付はこのまま年末で失効させます。年明けの一律歳出削減（Sequestration）は半年間の先送りとします。そうしないと、ロムニー次期政権が動き出すのは3月くらいになるでしょうから」

「共和党に対して、意外と優しいんだね」

オバマ大統領は少し拗ねたように言った。ペローシは構わずに続けた。

「これだけ妥協すれば、彼らも文句はないでしょう。アメリカ経済への影響はこれでずいぶん軽くなります。国民負担増はGDP比で1%と少しくらい。景気回復の腰を折ることはなくなるでしょうね」

「それだけサービスすれば、株価も上がるわけだ」

オバマは乾いた声で笑った。

「それから、下院民主党内の選挙準備も始めたいと思います。私はこのレイムダック議会で院内総務を辞任します。新しい指導部へのご協力をお願いしますわ」

やるな、このお婆さん、とオバマは思った。自分の政権はこのペローシとともにあった。前半の2年間は下院議長として、後半の2年間は院内総務として、不得手な議会工作を助けてくれた。外交におけるヒラリー・クリントン国務長官とともに、2人の女性がオバマ政権を支えてきた。しかしこのチームもいよいよ最後の時が近づいている。

「あなたが考えているのは、もう2016年のことなのですね？」

「ええ、大統領。ロムニーは早晩、党内保守派の圧力にさらされます。でも2年後には、きっと増税に踏み切ることになる。そうでないとこの国の財政がもちませんからね。ちょうど1990年に、ブッシュ Sr.が増税した時と同じことが起きる。民主党が反転攻勢を目指すとしたら、その後の2016年でしょう」

「長期戦略のための一時的撤退というわけか」

オバマは笑いながら言った。

「そのとき、あなたが応援するのは私ではなくてヒラリー・クリントンかな？」

「先のことはわかりませんわ」

ペローシはさわやかに切り返した。

「一般論として申し上げますが、私はこの国で初の女性大統領が誕生するために、最大限の努力をしたいと思います」

ひとつの物語は終わり、新しい物語が始まっている。なんだか久しぶりに詩を書いてみたくなった。自分は政治家を廃業して、作家になるべきなのかな？

●方針：クレイトン・クリステンセンの献策

まるで散歩のついでのような気軽さで、ボストンにあるロムニーの政権移行事務所を訪ねてきたのは、川向うのハーバード大学のクレイトン・クリステンセン教授だった。

「やあ、よく来てくれたね。うれしいよ」

ミット・ロムニーは大学の後輩である旧友を出迎えた。二人が応接室に入ると、すぐに秘書がミネラルウォーターを運んできた。敬虔なモルモン教徒である二人は、コーヒーやアルコールの類を一切口にしない。

「あんまり重い宿題なんで参ったよ。大統領就任演説の草稿を考えろ、だなんて」

『イノベーターのジレンマ』などの名著があり、ハーバード大学ビジネススクール(HBS)を代表する知性の一人であるクリステンセン教授だが、専門外の仕事には難儀したようだ。「なあに、アイデアだけ言ってくれればいいんだよ。文章化するのはこちらのスタッフが行う」

「オーケー。メモも何にも作ってないから、口頭で言うだけだよ。私が考える就任演説のキーワードは、”The business of America is business.”(アメリカ人の本分はビジネスである)——これで行くべきだと思う」

「その言葉は、クーリッジ大統領だけ」

「そう。1920年代のもっとも目立たない共和党大統領、カルヴァン・クーリッジの言葉だ。オバマの政策はアンチ・ビジネス的だったし、彼は”If you’ve got a business – you didn’t build that.”(あなたがビジネスで成功したとしても、それを作ったわけではない)なんて失言もやらかしたよね。彼は民間より政府が大事という人だったし、経済活動が生み出す価値もわかっていなかった。だが、今はもうそんな時代ではない。皆で働いて、稼いで、アメリカ人の本分であるビジネスに立ち返ろう。そうやって国際競争力を取り戻そう。自分はその先頭に立つ、というわけだ」

「なるほど、面白い。民主党も、共和党内の保守派も、反対しにくいロジックだな」

「もうひとつ、この案のいいところは、クーリッジは口数が少なくて目立たない大統領だったが、任期中に財政赤字をきれいに解消した。”Silent Cal”と呼ばれたクーリッジ大統領のように、自分も多くを語らずクールに仕事をする、と宣言したらいい。君の前任者はよくしゃべる人だったけど、公約はあまり達成できなかったからね」

「ありがとう、このアイデアはいただくよ」

共和党内では、以前に比べてプロ＝ビジネス派の政治家が減っている。そのことがロムニーのような中道・穏健派の立ち位置を難しくしてきた。いつの時代でも、プラグマティズムが人を熱くすることはない。片言隻句が瞬時に世界を駆け巡るインターネット時代においてはなおさらだ。だが、党派色の強い政治を終わらせるためには、口数を減らして実務(ビジネス)に立ち返るほかはない。オバマは「ひとつのアメリカ」を口先で訴えるだけで、かえってこの国の亀裂を深めてしまったではないか。

「なあ、もう一度考え直して、僕の政権に入ってくれる気はないかな。NEC(国家経済委員会)の担当補佐官でもいいし、CEA(経済諮問委員会)の委員長もある。ビジネススクールの視点で、プロ＝ビジネス政策の指揮を執ってくれないか。それに正直なところ、僕はマクロのエコノミストという連中が信用できないんだ」

「あはは、次期大統領殿。私は大学での今の暮らしが気に入っているし、ボストンを離れる気はないよ。信仰生活と家族も大事にしたいしね」

「しかし、より大きな問題に取り組みたいなら、ワシントンはボストンよりも手ごたえのある場所だよ。クリステンセン教授が、政治の世界のイノベーション研究に取り組んだら、ノーベル賞級の成果が出ると思うけどな。気が変わったら、いつでも電話をくれたまえ」

HBSの先輩と後輩は固い握手を交わした。政治の世界のイノベーションは確かに必要だな、とクリステンセン教授は考えた。なにしろ世界中がそれで困り果てているのだから。ことによるとロムニーの「プロ＝ビジネス政治」は、同じ問題で苦しんでいる欧州や日本でも模倣されることになるのかもしれない……。

●外交：ボブ・ゼーリックの驚愕

ワシントン DC のフォギーボトムという地名は、文字通り霧が立ち込める低地を意味している。日本の「霞が関」という地名と不思議と重なっている。偶然にも米 국무省は、そのフォギーボトムにある。

この古めかしい7階建ての広大なビルに、ボブ・ゼーリックは久々に足を踏み入っていた。年の瀬に訪米した王岐山副首相が、次期ロムニー政権の外交政策スタッフの元締めであるゼーリックとの会談を希望したからである。

懐かしい廊下を歩きながらゼーリックは考える。この建物の中のことは、自分は何でも知っている。最初はブッシュ Sr.政権のとき、ベーカー国務長官の腹心だった。次はブッシュ Jr.政権の国務副長官で、ときの国務長官はコンドリーザ・ライスだった。

館内ですれ違う顔ぶれの中には、昔からよく知っている職業外交官もいる。なかにはゼーリックを見かけて、慌てて駆け寄ってきて挨拶する者もいる。なにしろ自分は、次期国務長官の有力候補であるからな。さらに言えば、自分が国務省内で好かれていないこともよく知っている。それは当然だ。自分は以前から彼らを存分にこき使ってきた。今後もちろん、官僚たちの機嫌を取るつもりはない。

王岐山は満面の笑みを浮かべて待っていた。

「共産党政治局の常務委員に昇進されたそうで、お祝いを申し上げたい」

ゼーリックは先手を打った。

「あなたこそ、近いうちに重職に就かれるというもつばらの評判ですよ」

王岐山が達者な英語で応じる。お互いに遠慮のない間柄だ。

「申し上げておくが、次の国務長官はジョン・ハンツマンじゃないかな。次期大統領殿は同じ信仰で結ばれた同志がお好きだ。前中国大使は悪くないチョイスだと思いますよ」

「いやいや、中国人は最初に井戸を掘った人のことは決して忘れません。あなたは米中戦略対話を軌道に乗せた恩人です。それから、あなたが作った”Responsible Stakeholder”という言葉は、米中関係の歴史の一部です」

なるほど、それが用件か。ゼーリックはすぐに納得した。オバマ政権下では米中戦略・経済対話が4年間続けられた。中国では習近平体制、アメリカではロムニー政権、互いに新指導部が発足するこの時期に、次の米中関係の枠組みを考えなければならないのだ。

「率直に伺います。ロムニー次期大統領の外交政策チームはどうなっていますか？」

「こちらも率直に言おう。滅茶苦茶だ。私が外交政策の総括ポストに就いたのは、選挙戦が進んでからだった。その時点で、外交スタッフ陣はネオコン連中が一杯で、それぞれに好き勝手なことを言っていた。地域ごとの政策はバラバラだし、しかも軍事予算が減らされるのにタカ派路線になっている。あれではとても使いものにならん」

「対中政策はどういう方針でしたか？」

「最初の1年で、思いっ切り中国が嫌がることをする、というのが骨子だ。台湾に武器を売却するとか、ダライラマと会うとか、尖閣問題で日本寄りの発言をするとかね。中国側が音を上げてきたら、それから重い腰を上げて対話を呼びかけるという寸法だ」

「為替操作国の認定はどうですか」

「ああ、それは次期財務長官が決めることだ。あれはきわめて技術的な問題だからね。私は重要な問題だとは思っていない」

「なるほど、それではこちらも手の内を明かしましょう。中国は2013年1月1日をもって変動相場制への移行を発表します」

ゼーリックの眉毛と髭が、同時にひくっと動いた。

「わが国経済は既に『ルイスの転換点』を超えている、というのが現・常務委員会の判断です。すなわち、労働力不足による潜在成長力の低下が始まっている。こんな状態で景気対策を打ってもインフレを招くだけです」

「確かに、中国の外貨準備はこの1年間、3兆2000億ドル前後で増えていない。つまり介入を止めているということだね」

「その通りです。われわれは経済政策の大転換を行います。人民元レートを自由化し、上昇を容認することで輸入物価を安定させます。グローバル化を前進させることにより、より完全な市場経済へのシフトを図ります」

「すばらしい決断だ。次期ロムニー政権としてもこれを支持するだろう。習近平新総書記の指導力を、全世界に見せつけることになる」

「ありがとうございます。ことによると、中国は全世界に対してデフレではなく、インフレを輸出することになるかもしれませんが、それはご容赦願います」

「いや、市場メカニズムに対して異を唱える人間など誰もいないはずだ」

「何より今であれば、金融市場では誰も予測していません。敵が予測していないところへパンチを繰り出す。兵法の初歩です」

ゼーリックは内心であっと叫んだ。こいつは俺に、為替のインサイダー取引をしたらどうかと差し向けているのか。俺は仮にも、世界銀行総裁だった男だぞ。いや、これは彼らなりに「サービス」のつもりなのだろう。まったく中国人ときたら……。

かねがね政界では「親中派」(Panda hugger)と見なされているゼーリックだが、こういう瞬間にはいつも「ついていけない」と感じるのであった。

●密談：ベンヤミン・ネタニヤフの助言

1月19日、大統領就任式を翌日に控え、ミット・ロムニーは古い友人であるベンジャミン・ネタニヤフ首相を招いて内輪で夕食をとっていた。ロムニーがハーバード大学を卒業後、すぐに務めたボストン・コンサルティング社で同僚として机を並べた仲である。一緒になると、お互いすぐに気分は20代の頃に戻る。が、今はともに重責を担う立場である。

「お互いにこんな立場になるとは思わなかったな」

「まったくだ。だが、君が明日アメリカ合衆国大統領になれば、私はイスラエル首相としてその靴を嘗めなければならなくなる」

「冗談はよせよ。君の脅しはあのオバマを何度も震え上がらせていたじゃないか」

「いやいや、ここだけの話、あれはハッターリだ。君には隠したくないから言うておくが、わが国がイランの核施設を攻撃することは、技術的にもできることではない」

「確かに、そういう報告はCIAからも受けているが……」

「あんな風に存在を主張していないと、蛇蝎のごとき連中が跋扈する中東では生き残っていけないのだ。だが幸いなことに、われわれにはアメリカがいる」

「3度目のテレビ討論会でも、そんな質問が出たな。確か『アメリカは同盟国である日本のように、イスラエルのことも考えているのか』と。オバマの答えは”U.S. will stand with Israel if it's attacked.”だった。現職大統領がそこまで言うか、と隣に居て驚いたよ」

「アメリカ大統領にそのような発言をさせること。それこそわが国の安全保障戦略の根幹だ。イスラエルという国は、半分はアメリカなんだ。私自身の人生がそうであるように」
ロムニーは少し矛先を変えてみた。

「そういえば、君は4年前、オバマが大統領に就任する直前にも会っているよね。あいつにも今と同じようなことを言ったのかい？」

「まさか。そこまで親切にする理由はないさ。ただし新しいアメリカ大統領と最初に会談する名誉は誰もが欲しいと思っている。嫌われ者のイスラエルとしては、少しフライングすることでその権利を得ているだけさ」

「なるほど。プレビューショーに行けば、並ばずに話題の映画が見られるというわけか」

「国家首脳の前輩として、ひとつアドバイスさせてもらおうか。新大統領が最初に会談を行う名誉は、誰も羨まない国に献上するといい。外交の世界で嫉妬は怖いよ」

「さすがは元コンサルタント、適切な助言だ。つまり最初の会談相手は、形式だけでいいことだな。今ならさしずめ当選したばかりの日本の安倍首相かな。もっともあの国は、すぐにトップが変わってしまうからなあ……」

二人の遠慮のない会話は、アルコールを交えずに夜遅くまで続いたのだった。

<今週の”The Economist”誌から>

”Ohio: Coal or cars”

「オハイオ州：石炭かクルマか」

United States

Oct. 27th 2012

*オバマ対ロムニー、最終決戦の地はたぶんここでしょう。The Economist 誌は激戦州を連載で分析してきましたが、その最終回はオハイオ州です。

<要約>

選挙人数 18 人は激戦州としては第 3 位。ロムニー選対はフロリダの勝利に自信を持ち、ペンシルバニアでは届かない。ゆえにオハイオが最大の山場となろう。2004 年にはこの州が生死を分けることとなり、1964 年以来連続で勝者を選んでいる。それでも投票日を 10 日後に控えて形成は不明。オバマがリードとはいえ 1~2p 差でロムニーが追っている。

2008 年にはオバマが 52 対 47 で同州を獲得した。タイヤ業を営む地元共和党員によれば、今回の候補者はマッケインよりもタマがよく、第 1 回テレビ討論会以後はボランティアにも熱気が出てきた。中小企業をよく理解していることが、ロムニーの良さであるという。

オバマにとって雇用は必ずしも障害ではない。同州の失業率 7%は全国平均を下回る。州東部でシェールガスが出たせいもある。だが景気回復は、2010 年に当選した共和党ケーシック知事の尽力に負うところもある。無党派層はどちらの肩を持つべきか悩ましい。

オバマの悩みはアパラチア山系の石炭業者だ。10 月 20 日、ライアン副大統領候補の訴えに、雨の中を数百人が詰めかけた。CO2 規制によって石炭火力が閉鎖され、電気料金も上がっている。石炭は同州のエネルギー源の 8 割を占め、地球温暖化への警戒感は薄い。

他方、クルマはオバマの味方である。85 万人が自動車産業に就き、GM とクライスラーの救済に救われている。ロムニーが会社を破綻させろと言ったという広告が流されている（実際には、政府資金なき長期の再生を支持しただけで、オバマ案と大差はない）。

地元選出の共和党下院議員は、オバマの救済は組合票目当てであり、本当に必要な大リストラを遅らせたただけだと批判する。ただし救済自体の評価は州内では高いようだ。

つまるところ勝敗はイデオロギーではなく、投票率で決まるだろう。同州は投票日 35 日前からの投票を認めており、3 人に 1 人は投票日前に済ませてしまう。つまり明らかに現職に利があるのだ。オバマ選対はオハイオを重点州として、2008 年以来腰を据えている。2010 年中間選挙では敗北したものの、去年はケーシック知事の公的部門改革案を住民投票で葬り去っている。州内に 125 もの事務所を持ち、ロムニーの 40 拠点を凌駕している。

技術面では明らかに民主党の方が進んでいる。ネットを利用して、ボランティアの会合や無党派層への電話戦術を進めている。だが共和党陣営も、オバマへの嫌悪感をたぎらせて熱がこもっている。期日前投票でも民主党に引けを取らないと訴える。

オバマの選挙活動は安全な大学町に限定されている。クリーブランド近郊では 4 年前に 7 割の票を取った。関係者は「投票率さえ上がれば勝てる」と自信の程を示している。

<From the Editor> とは言うものの…最終予想

「ロムニー当選」の架空小説はいかがでしたでしょうか。11月6日には結果が出てしまいますので、賞味期間がきわめて短いシミュレーションとなります。ただし正直なところ、筆者はロムニーの勝ち目は薄いと思っています。

9月下旬の時点では、オバマ大統領が明らかにリードしていました。流れが変わったのは10月3日のテレビ討論会から。ロムニーは余裕のある態度で大統領を翻弄し、逆にオバマは集中力を欠いていました。重要なのは、「大統領らしく」見えること。視聴者には「ロムニーって、意外と悪くないじゃないか」という印象が残ったのでしょうか。

この日を境に雰囲気が変わりました。勝てると思っていた共和党支持者たちが、自分たちの候補者を見直し始めた。それまでロムニーは、自分自身に対するポジティブなイメージを打ち出すことができなかった。その間隙を埋めたのがオバマ陣営によるネガティブ・キャンペーンで、「首切りが好きな経営者」「庶民の気持ちが分からない大富豪」「コロコロと意見を変える政治家」というイメージが先行してしまいました。

共和党支持者の本心を忖度すれば、「これで勝てるものなら、できれば勝っておきたい」でしょう。彼らはロムニーが気に入らない。だがオバマのことはもっと嫌いである。医療保険改革、金融規制、大型景気刺激策、自動車産業救済など、この4年間でオバマは政府の役割を肥大化させ、財政赤字を倍増させてきた。さらに4年の任期を与えたら、どこまで民間の生活に介入してくるか分からない。

オバマ支持層は、最初から支持を決め打ちしているから、事前に予想されていた以上には票が伸びない。ところがロムニー支持層は、土壇場になって動き始めた。「本当はモルモン教徒なんて嫌いなんだが、この際、アイツでも仕方がないだろう」「政策を中道寄りに戻すことも、勝つためには黙認してやろう」——2008年には若い有権者の熱い思いがオバマを後押ししましたが、それとは対照的に2012年は保守層の冷たい打算がロムニーに向かっているように見えます。

それでは最終結果はどうなるのか。一般投票はさておいて、選挙人数を積み上げると最後は毎度おなじみ中西部のオハイオ州が勝負どころとなります。オバマとロムニーのいずれも、オハイオ州の18人を抜きに勝利する組み合わせは非常に考えにくいのです（架空小説では、ここはちょっと無理をしています）。

そのオハイオ州では、オバマ大統領が当初から優勢を維持している。州内の事務所数は、ロムニー陣営40か所に対してオバマ陣営が125か所（前頁の”The Economist”を参照）。なにしろオバマ陣営は、2008年選挙の時から同州に腰を据えて運動を続けている。ボランティアの動員から献金の集め方、テレビCMの打ち方やソーシャルネットワークサービスの利用法まで手慣れたもの。豊富な資金量を武器に、過去4年間、激戦州で着々と布石を打ってきた効果が生きているというわけです。

ということで、筆者は僅差でオバマ大統領が再選されると見ています。しかるにその実情は、まるで普段の授業では冴えなくせに、試験の時だけ要領よく立ち回る秀才みたいではありませんか。

つくづくオバマは選挙の達人かもしれませんが、政治の世界では凡人クラスなのかもしれません。4年前に『オバマは世界を救えるか』（新潮社）などという大仰な題名の本を上梓した筆者としては、いささか苦々しい思いをしています。

* 次号は2012年11月16日（金）にお届けする予定です。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com